

観 光

高知県は、世界に通用する「本物と出会う高知観光」の実現を目指している。

◎県外観光入込数	371万人(2022年)
◎観光総消費額	966億円(2022年)
◎県内平均観光消費額	26,076円(2022年)
◎延べ宿泊者数	256万人泊(2022年)

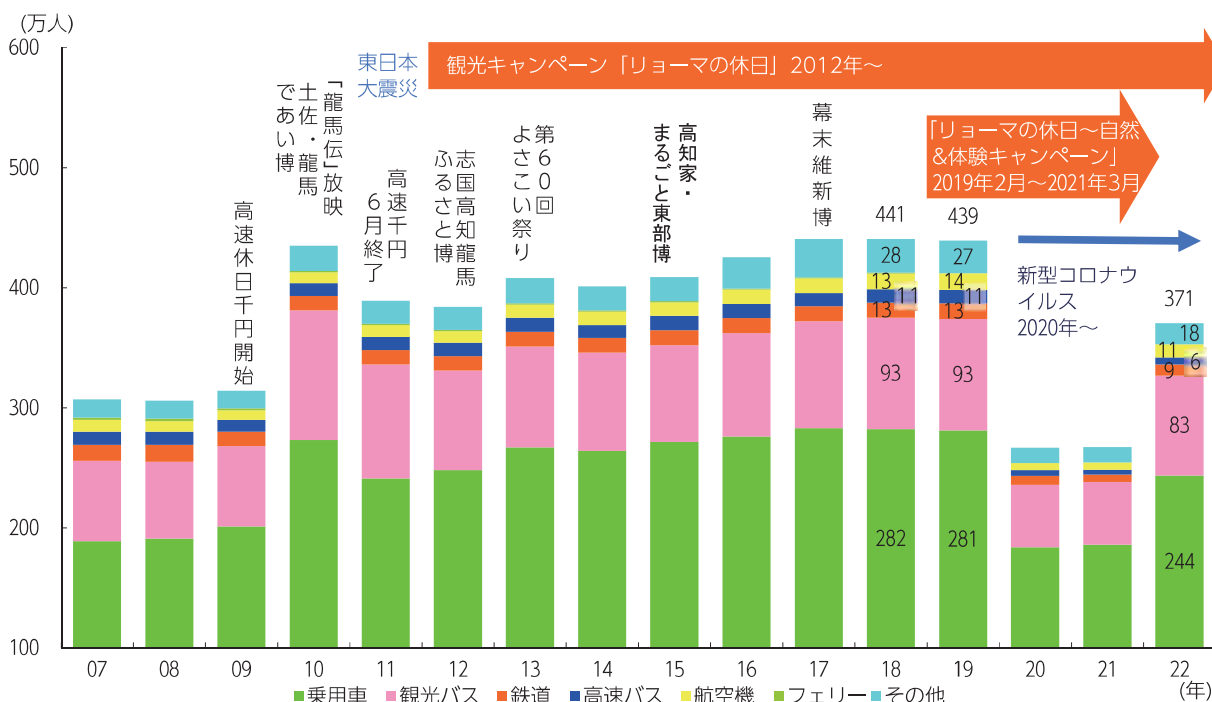


概 要

高知県は、明治維新前に活躍した坂本龍馬や中岡慎太郎、武市半平太のゆかりの地であり、「最後の清流」四万十川や「仁淀ブルー」で知られる仁淀川、四国カルストに象徴される豊かな自然や、鰹や清水サバ、文旦、柚子、フルーツトマトといった多種多様な山の幸・海の幸によってもたらされる、地元ならではの美味しい食事を楽しむことが出来る。また、お座敷遊びをはじめとした酒文化が楽しめる「おきゃく文化」や、300年以上の歴史を持ち、街路市の長さとしては日本一（約1,000m）の日曜市、高知の夏の風物詩で全国各地から個性豊かな踊り子が集まる「よさこい祭り」など、多種多様な観光資源を有している。

高知県では、外貨を稼ぐ滞在型の観光地域づくりを目指すべく、観光振興を「高知県産業振興計画」の重点施策の一つとして継続的に取り組んでいる。これにより、計画策定時の2009年には316万人だった観光客数は、コロナ前の2019年には439万人まで約4割増加した【観光－1】。またそれに伴い、観光消費額も2009年の762億円から、2019年には1,097億円まで増加した【観光－2】。

【観光－1】 県外観光客入込数の推移（交通機関別）

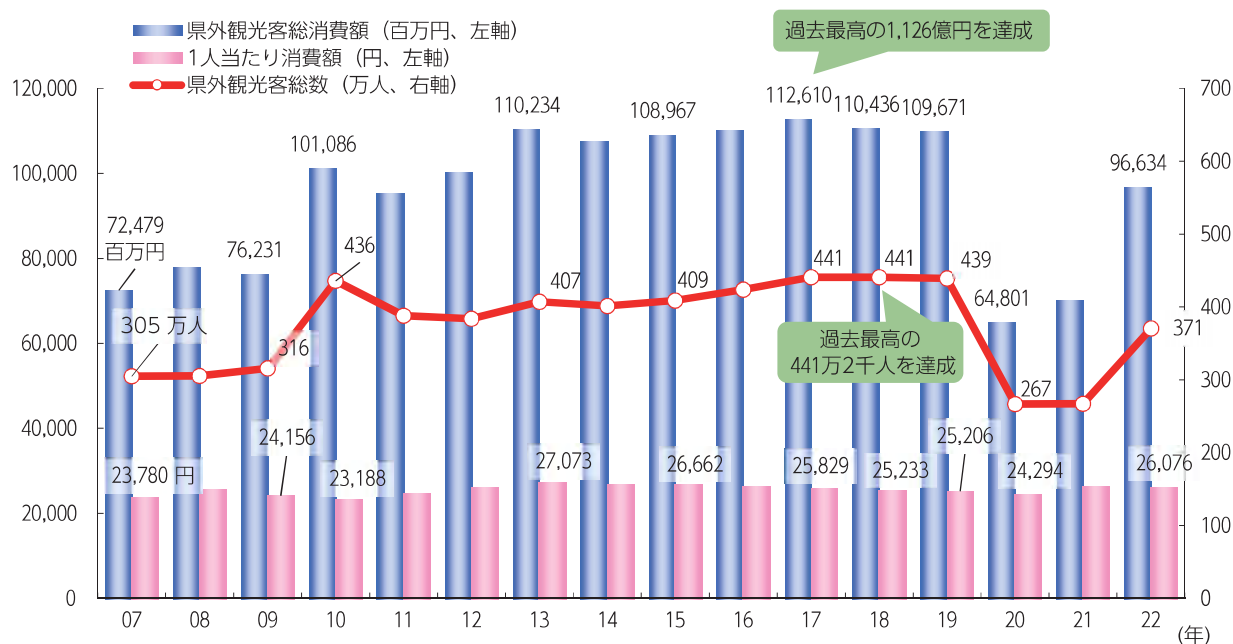


注1：2011年から「その他」に航空機チャーター便と客船を加えている

注2：各数値は単位未満を四捨五入して表記

資料：高知県「県外観光客入込・動態調査報告書」

【観光-2】 県外観光客入込数・1人当たり消費額・観光総消費額の推移



注1：2011年から「その他」に航空機チャーター便と客船を加えている

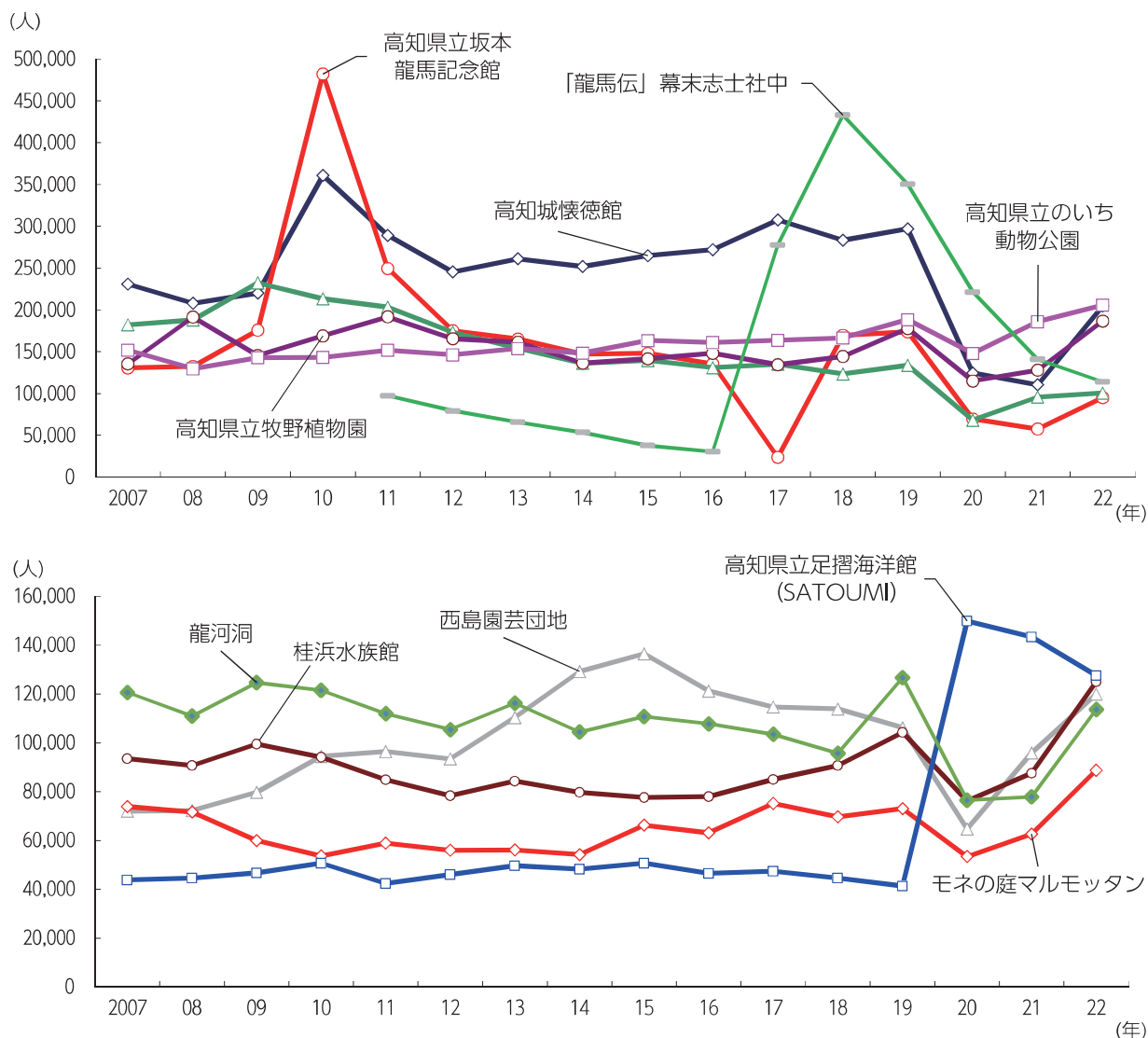
注2：各数値は単位未満を四捨五入して表記

資料：高知県「県外観光客入込・動態調査報告書」

主要観光地(施設)の入込状況

主要観光施設の入込状況をみると、NHK大河ドラマ「龍馬伝」が放映された2010年には、高知県立坂本龍馬記念館や高知城の入込客数が大幅に増加した他、2017年3月から2018年12月に亘って高知県全域で開催された「志国高知 幕末維新博」では、「龍馬伝」を機に作られた観光施設「龍馬伝」幕末志士社中のリニューアルと共に入場料が無料となったことから、2018年には同施設の年間来場者数が43万3千人（前年比+55.9%）となった。2020年には新型コロナウイルス感染症が拡大し、県立施設などを中心に営業自粛を余儀なくされたが、同年リニューアルオープンした高知県立足摺海洋館（SATOMI）や、大手旅行情報サイト「トリップアドバイザー」の口コミによるランキングで2019年・2020年と連続1位となったのいち動物公園などでは、コロナ禍にも関わらず多くの観光客が訪れた【観光-3】。2023年5月には新型コロナウイルス感染症の拡大防止のための行政措置の位置づけが、「5類感染症（季節性インフルエンザと同等）」に移行したことで、県内全域でコロナ前（2019年）を上回る入込客数となり、「よさこい祭り」を始め多くのイベントが4年振りに開催された。

【観光-3】 高知県の主要観光施設入込状況



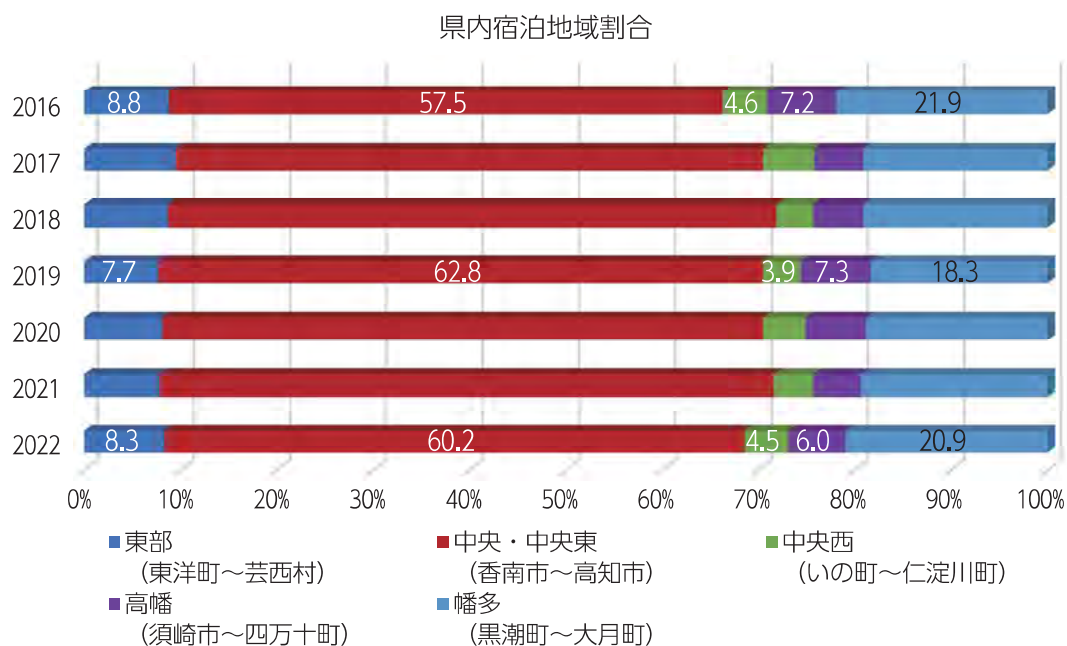
資料：高知県「県外観光客入込・動態調査報告書」

県内全体・地域別の観光動向

高知県は東西に広く、観光地が点在しているため、観光客は県中央部に宿泊し、そこを観光拠点として移動するケースが多い。高知県内に宿泊する県外観光客のうち、約6割が中央・中央東（香南市～高知市）に宿泊している【観光-4】。

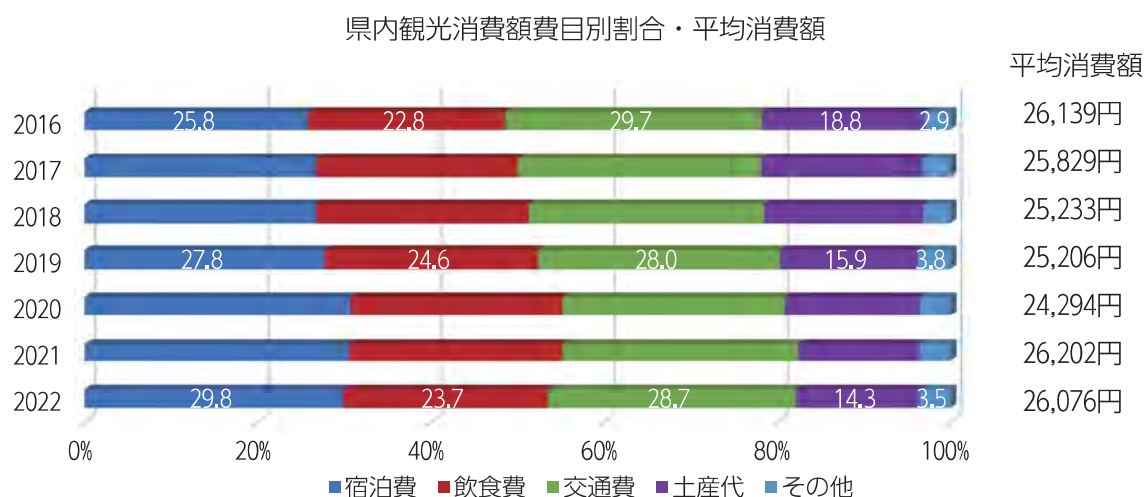
次に、県内観光消費額をみると、費目別では「宿泊費」の割合が最も高く、次いで「交通費」となっている。2022年の全体の平均消費額は26,076円と、2014年と比較してほとんど変化はないが、「土産代」が年々減少傾向にある他、観光施設の入場料や体験料、レンタル料が含まれる「その他」の費目が一人当たり1,000円と少ない【観光-5】。

【観光-4】 宿泊地域の割合は、高知県中央部が大きい



資料：高知県「県外観光客入込・動態調査報告書」

【観光-5】 観光消費額の費目別では、宿泊費の割合が大きい一方、土産代が年々減少傾向にある



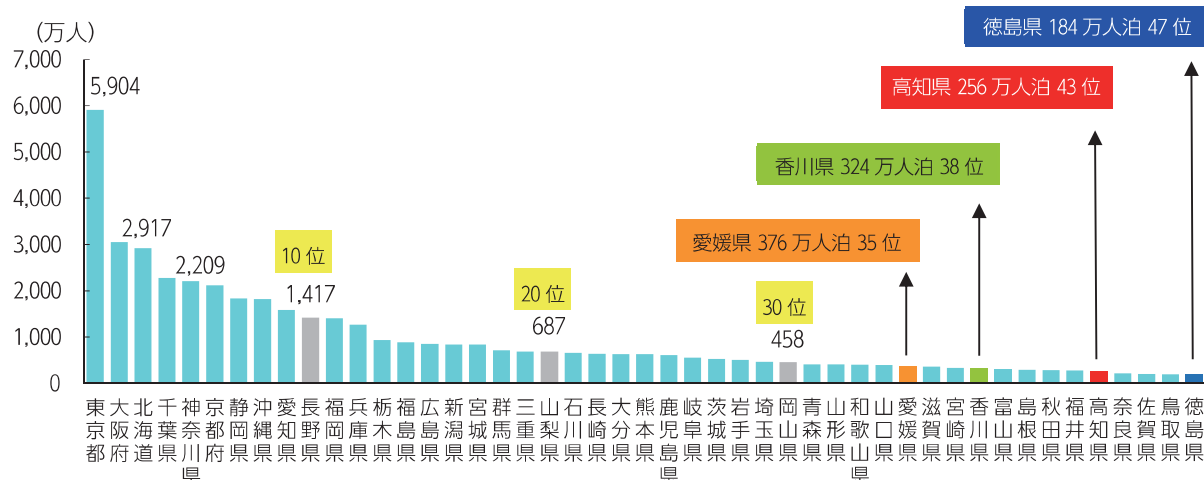
注：日帰り観光客の観光消費額を平均値に含む

資料：高知県「県外観光客入込・動態調査報告書」

宿泊旅行統計から見た高知の観光

観光振興を推進するうえでの重要な基礎データとして、観光庁による「宿泊旅行統計調査」が2007年から実施され、全国統一基準による各都道府県別の宿泊者数等の把握、比較が可能となった。2022年の都道府県別の延べ宿泊者数(全宿泊施設対象)をみると、上位は東京都、大阪府、北海道、千葉県、神奈川県となり、コロナ前に人気の観光地であった京都府、沖縄県などは、修学旅行や外国人旅行客の割合が多かったため、コロナ禍において減少幅が他県よりも大きい。高知県は256万人泊、全国43位であり、コロナ前の2019年比で11.7%減と全国平均(24.4%減)に比べコロナ禍による影響は少ない【観光-6】。

【観光-6】 都道府県別延べ宿泊者数【2022年（確定値） 全宿泊施設】



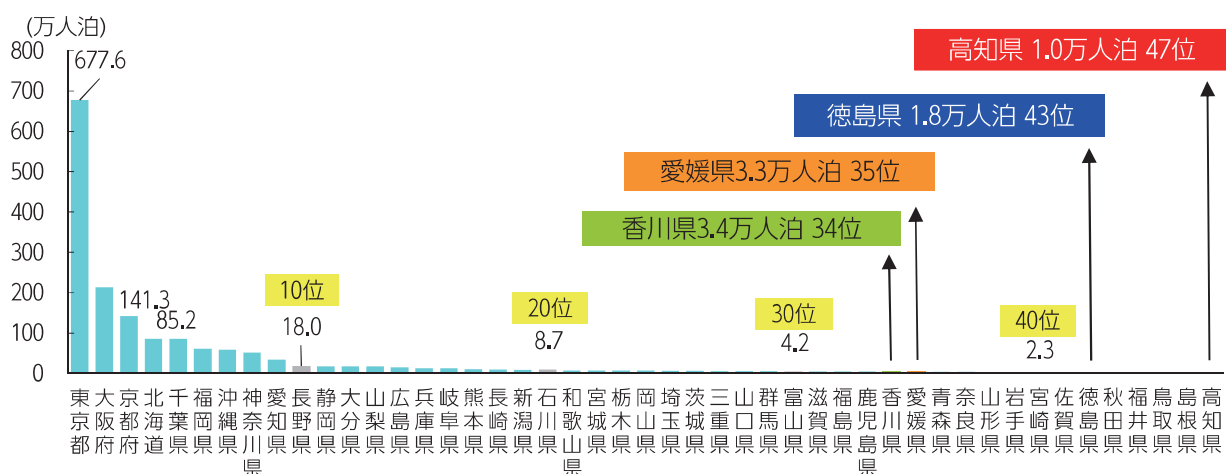
資料：観光庁「宿泊旅行統計」

次に、訪日観光客の状況をみると、高知県における外国人延べ宿泊者数は2012年～2019年にかけて増加していたが、2022年は1.0万人泊と、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、2019年比で約9割減少した【観光-7】。

高知県の2019年における外国人延べ宿泊者数を国籍（出身地）別にみると、台湾が2.5万人泊（30.4%）と最も多く、次いで香港の1.9万人（23.4%）となっている【観光-8】。なお、2023年は中国や香港からの旅行客の回復が遅れている一方で、台湾は5月より定期チャーター便の運航を開始したことで、2023年7月は2,570人泊と、コロナ前の2019年比で+15.8%となっている。現状は2024年3月までの運航だが、搭乗率は9割と好調であり、今後定期就航となれば安定的な入込が期待できる【観光-9】。

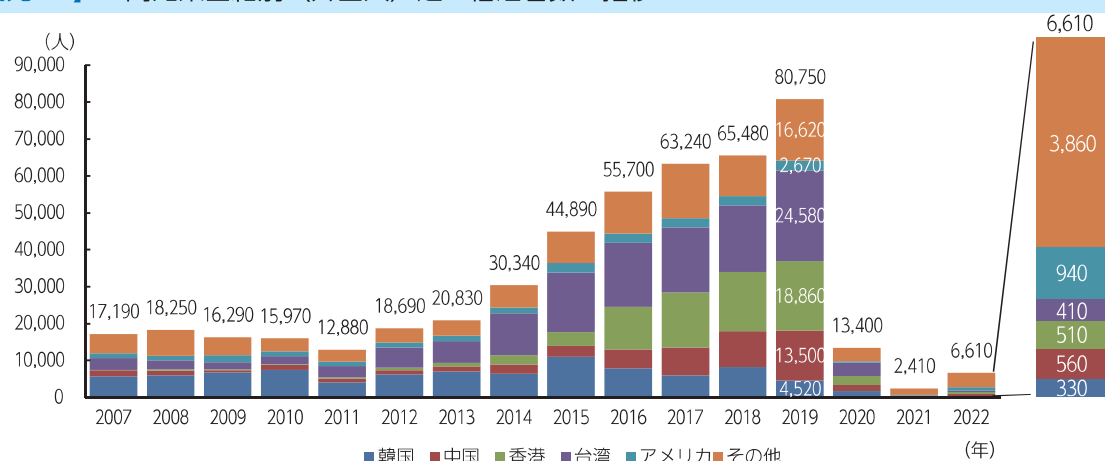
一方で、日本全体に占める高知県の外国人延べ宿泊者数はわずか0.1%にも満たないことから、官民をあげた情報発信と観光資源の磨き上げが、今後更に重要となる。

【観光-7】 都道府県別（外国人）延べ宿泊者数【2022年（確定値） 全宿泊施設】



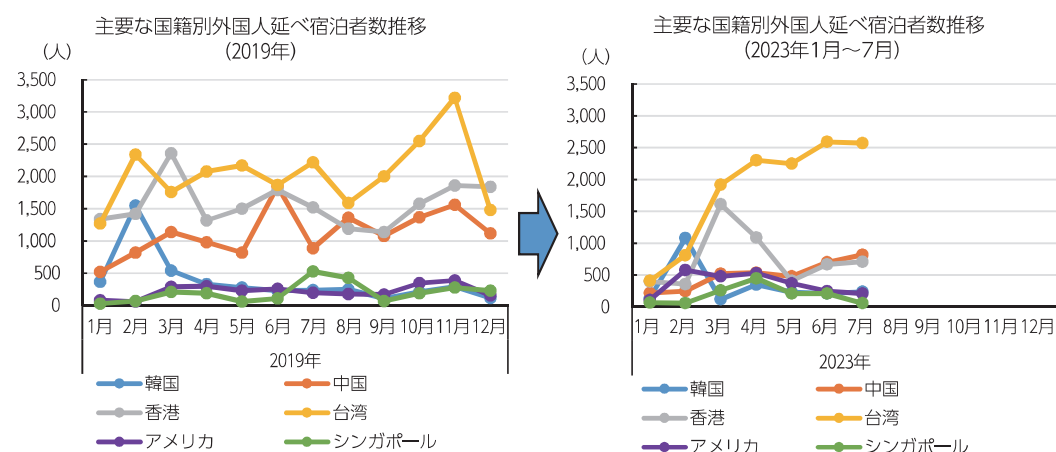
資料：観光庁「宿泊旅行統計」

【観光-8】 高知県国籍別（外国人）延べ宿泊者数の推移



注：2007～2009年は全宿泊施設、2010年以降は従業者数10人以上の施設に対する調査。
資料：観光庁「宿泊旅行統計」

【観光-9】 定期チャーター便の運航により、台湾からの訪日観光客が顕著に回復している。



資料：観光庁「宿泊旅行統計」

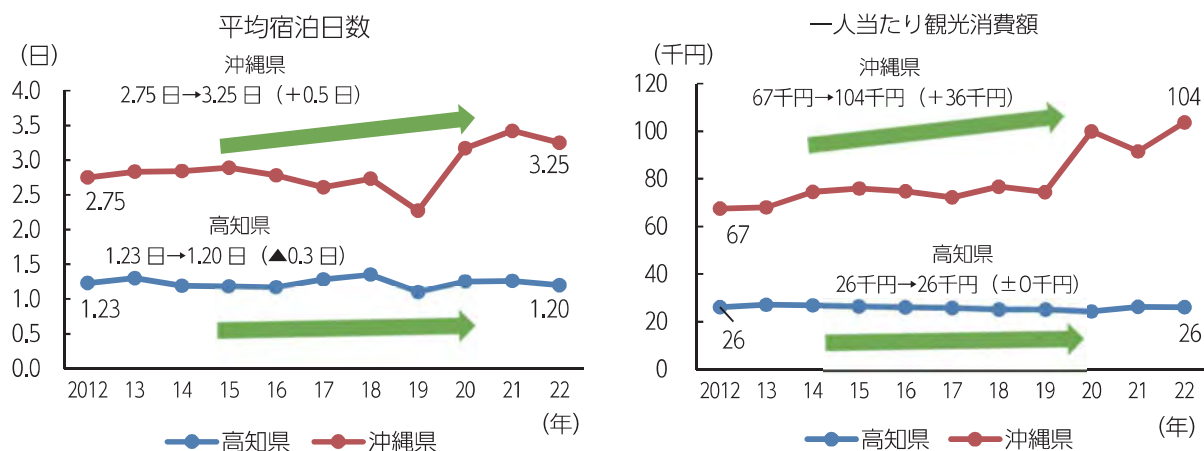
高知県観光の今後の展望

2023年はコロナ禍となって4年振りに人の往来が本格化し、お祭りやイベントなどの再開により再び賑わいが生まれた。今後観光客の動向が本格的に回復していく中で、その旅行需要を高知県が上手く取り込んでいくためには、次のような点について意識していく必要がある。

（1）観光客一人当たりの宿泊日数、観光消費額を増やす

高知県における県外観光客一人当たりの宿泊日数や観光消費額を見ると、2012年～2022年の約10年間でほとんど変化が無い。これに対し、例えば沖縄県では2022年度の観光客一人当たり宿泊日数は3.25日（2012年比+0.5日）、観光消費額は103,706円（同+36,247円）と、約10年間で大きく増加している【観光-10】。このため、宿泊施設や食事、体験の高付加価値化により、長期滞在するためのコンテンツの質・量を高めるだけでなく、元々長期滞在する傾向がある欧米豪などの訪日観光客（インバウンド）を取り込むことで、観光客一人当たりの宿泊日数、観光消費額を増やしていく必要がある。

【観光-10】 高知県は平均宿泊日数、一人当たりの観光消費額ともに、この10年間でほとんど変化は無い



資料：高知県「県外観光客入込・動態調査報告書」
沖縄県「入域観光客統計概況」

(2) 人出不足の解消により、観光客（特に宿泊客）の受入体制を整備する

「日銀短観（2023年9月調査）」で公表されている、労働需給を示す雇用人員判断D.I（「過剰」－「不足」）をみると、宿泊・飲食サービス業については－72と、全産業平均（－33）よりも更に人手不足感が大きい。この要因として、他の産業に比べて需要の季節変動が大きいことから、全雇用者に占める非正規雇用者の割合が大きくなり、結果として知識・スキルの継続的な蓄積による労働生産性の向上に繋がらず、雇用が定着しない可能性がある。

例えば宿泊者情報や購買データなどの集約による来訪者属性の見える化や、宿泊・体験予約サイトの統合などのDXを目指す一方で、繁忙期・閑散期の平準化が図れるような観光資源の掘り起こしなどを地域単位で実施していくことで、雇用の安定や、賃金水準を向上させていく必要がある。

(3) 効果的な情報発信により、高知県を次の旅行の選択肢として認知してもらう

世界的な旅行雑誌「Lonely Planet」の「Best In Travel 2022」の地域部門に四国が選定され、四国八十八カ所の遍路を通じたおもてなしの文化や手つかずの自然が注目されている他、「坂本龍馬」や「牧野富太郎」など、ドラマなどを契機としたいわゆる「ロケツーリズム」が注目されている。これらのチャンスをつかみ、旅行検討者にいち早く情報を届けることで、高知県を次の旅行先の選択肢として認知してもらう必要がある。